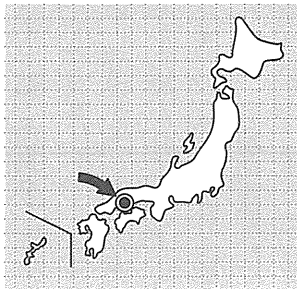
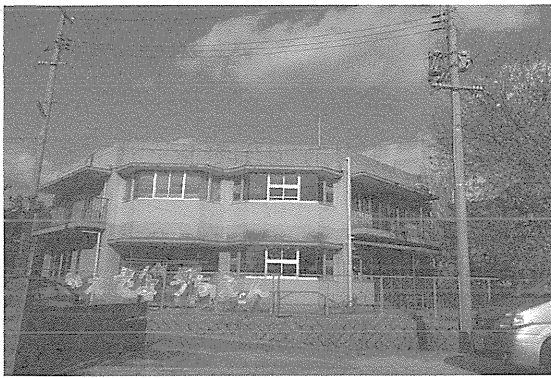


シリーズ
子どもが育つ
場所から

「あそんでぼくらは人間になる」



かえで幼稚園（広島県廿日市市）

園庭に隣接する広大かつ高低差のある「かえでの森」は、子どもたちの冒険心をかき立て、挑戦、発見、葛藤などの姿にあふれています。今回、「あそんでぼくらは人間になる」を合言葉に、主体的に考え、かわりながら共に成長し合う保育を実践しているかえで幼稚園を紹介します。



今号のレポーター

宮本雄太

東京大学大学院修士課程在籍。
ゆうゆうのもり保育園勤務。
園での実践知を哲学の視点から
再考し、実践の思索を論理的に
明確化したいと思っています。

かえで幼稚園は広島県の西南部、日本三景の一つである「宮島」の近くに位置し、非常に自然豊かで雰囲気の落ち着いた高台にあります。眺望も雄大で、日々この景色のもと生活をしている子どもたちのことを思うと、うらやましくもあり、ほほ笑ましくもあり、訪問客の心を温かくしてくれます。

かえで幼稚園の保育は、子どもの自由な発想を尊重し、自由に行動し、遊びを通した成長を大事に考えています。かえで幼稚園の保育は雑誌でよく取り上げられ、名は知られているところですが、一躍有名になったのは、テレビ新広島が制作したドキュメンタリーが放送されてからではないでしょうか。運動会をつくっていく過程で、子どもたちの意欲ややる気を引き出しながら、子どもたち自身で考えることを大事にし、いろいろな作戦を試していく中でクラスが一つにまとまっていく姿、また、コマ回しに挑戦していく過程で、

友達の存在に支えられながら乗り越えていく姿、大縄跳びの記録更新を目指す子どもたちの間に芽生えるライバル心と仲間を思う気持ちの揺れ動く姿など、どれをとっても感動的であり、一人の人間として存在する子どももの素晴らしい姿を映し出しています。まさに、かえで幼稚園が大事にしている「あそんでばかりは人間になる」を映像で物語っていて、そのドラマにどれだけの人が心を揺さぶられたことでしょう。

かえで幼稚園訪問

今回の訪問は、広島で行われた第24回乳幼児教育学会後で、十名以上集まったの訪問になりました。前日まで雨が降り続き、当日の見学が心配されましたが、この日は日差しが暖かく、子どもたちにとってまさに遊び日和、大人にとっても見学日和の一日でした。

園に着くと、少々緊張気味の私たちを横目

園庭の裏側には、泥団子を作っている子どもたちがいました。子どもたちがいる場所には、泥団子作りには最適の土と砂があります。年中さんが楽しそうにおしゃべりしながら作っている横では、苦戦している年少さん。すると、その年少さんが、急に辺りを行ったり来たり。「どうしたのかな」と様子を見てみると、手にペットボトルのキャップを持ってうれしそうに戻ってきました。そして、土を入れ、砂をかけ始めたのです。そう、キャップ団子を作ろうと思ったのでしょうか。手で作る泥団子は少し難



▲泥団子作り

しかったようで、キャップ団子に切り替えたようです。その姿を見て、年中さんが「こうだよ」と教えている姿がありました。

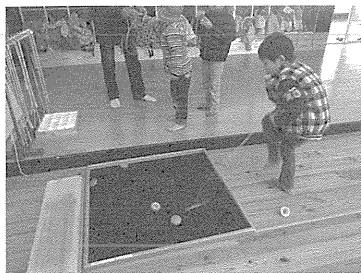
さらに、園庭

をぐるっと回っていくと、年長クラスのテラスでは、野球ボールを持つている女の子が座っていました。そこにはお米の入ったすり鉢があり、野球ボールを中で転がすことで、脱穀をしていたのです。興味深い姿がたくさん見られました。

続いては室内を見学です。室内では、先日園内で創作展「そうさくらんど」が行われたばかりということで、作品があちらこちらに残っていて、それを使って余韻を楽しむ子どもたちの姿がありました。中には相当ポロポロになったものもあって、作った物をとことん楽しむ子どもたちの姿が想像されます。ま



▲脱穀作業



▲コマ回し

さんはずでに回せる子も多くいるようですが、この日は回せずに何回も挑戦する男の子がいました。職員も回し方を教え、周りでは子どもたちが様子を見て、時



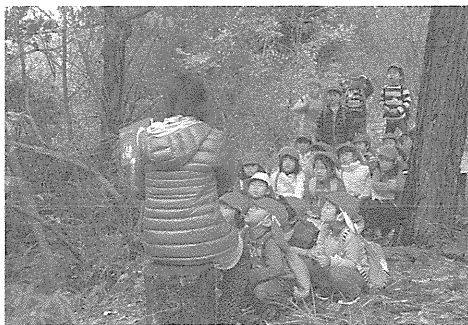
▲創作展の余韻

さに過程を大事にしてきたからこそ作った物への愛着が持てるのだろうと感じた瞬間でした。

ホールでは、コマ回しに挑戦する子どもたちの姿がありました。年長

に声を掛けている姿がありました。さすがに、「回せた！」という決定的瞬間には立ち会うことはできませんでしたが、落ち込むことなく挑戦し続ける姿は感動的でした。

この日は午前保育で、すぐに片付けで集まりの時間になってしまいました。雨上がりでしたので、森で遊ぶ姿が見られず残念に思っていた矢先、年中のあるクラスが森で絵本を読むというので、森へ出かけに行きました。大自然に囲まれながら絵本に真剣に見入る姿、そしてその遠方には広大な山々（厳島？）が見られ、何と幻想的で優雅な時間だろう、と



▲「かえでの森」で絵本

一人感慨深い思いに浸ってしまいました。

お弁当や食後の遊ぶ姿は見られず残念でしたが、短時間でも、かえで幼稚園の魅力ある保育、魅力ある子どもたちの取り組む姿が見られた見学でした。

中丸園長へのインタビュー

園長の中丸元良先生に、かえで幼稚園の保育についてお話を伺いました。

——日々の保育で大事にしていることは、どのようなことですか？

「子どもは遊びの中で育つ」ということを意識しています。また、子どもは自分で考え、作り出す力・挑戦しようとする力を持っているので、過度に大人が援助しないようにしています。

例えば、子どもたちが好きな遊具「屋根のぼり」でも、大人が援助することは簡単です。

しかし、援助してしまえば、降りる時や次に挑戦する時に、加減や踏ん張り方がわからず、けがにもつながってしまいます。しかも何より、手伝ってもらってのぼつたら、何の魅力もありません。自分で苦労して考えて、友達に教えてもらって、というその過程こそが大事で、だから何度も挑戦したくなるし、のぼつた時の高揚感、満足感は格別なのです。また、ロープを手にできなくても、子どもたちは屋根の木の隙間に指を入れ、のぼるなど、いかにしてのぼれるのかという工夫を凝らします。その工夫の過程にも、目の前の課題に挑戦しようとする子どもの意志が見られます。

——行事にも子どもの意志が組み込まれる工夫を凝らしているとのことですが？

先日、「そうさくらんど」という作品展がありました。そこでも、子どもたちの気持ちに沿うよう配慮しています。『作品展』とし

て作るのではなく、日ごろの遊びからクラスで話し合い、テーマを決め、自分たちの立てた目標に向かってさらに話し合いながら作っていきます。つまり、作品展に向かう過程自体がすでに子どもたちにとっての『作品展』なのです。それは、他の行事においても同様です。

——広大な敷地だからこそ、職員の配置や連携について、日ごろから気にされていることはありますか？

確かに難しさはあります。しかし、フリーの職員もたくさんいて、しかもどの職員も一人ひとりの子どものことを知っています。最低限に放っておいても大丈夫な環境ではあるようにしています。子どもは、冒険して学んでいくものです。冒険の過程で、小さなけがは、その子にとって良い経験になるので、あ
る意味「良いけが」と言えるでしょう。しか

し、大きなけがは避けるようにしています。そのさじ加減を見ていくのも、保育者の専門性と言えるのではないのでしょうか。

また、その保育をするにも、職員の連携をどうとっていくかは大事な問題です。そこには、チームとしての信頼感やお互いの理解、同僚性が重要になってきます。例えば、保育の情報交換以外の「人間としてのつながり」という面も大事にしています。それは、気軽に話せたり、付き合えたりする関係です。また、本園では、保育者の保育歴も5年から33年（平均して15年）と、経験の多寡や男女、既・未婚などいろいろな職員がいます。家庭を持つている職員が多いからこそ、わかり合えること、協力し合えることも多いし、そこから学び合えることも多い。子どももそうですが、大人も同様に、そういった基本的な人としての関係づくりは大事にしています。

